

全体会議 (分科会報告)

第I分科会

長者窮子について

座 長 柴田章延

模範説教 蓮見高円

問題提起 伊藤瑞康

助言者 鈴木隆泰

記 録 中井本蓉・吉木祥介

運 営 古河良啓・小瀬修達

一、はじめに

第I分科会は十八名が参加した。法華経の長者窮子喩から感じたこと、得たことをいかに現場の布教に生かすかという視座のもと、法華経で成仏するとはどういうことか、僧侶はどのような姿勢で人々に成仏を伝えていくか、という点について討議した。

二、問題提起・横説

①問題提起

長者窮子の譬えにおいて、考察すべきテーマをいくつか見いだすことができる中で、第Ⅰ分科会としては以下のよ
うな問題を提起したいと考えます。

長者窮子の譬えが説かれる「信解品」では、四大声聞が法華經に出会えた喜びを述べます。彼らは当初は成仏を断念しており、無上菩提への道を求めていませんでした。しかし、思いがけず無上菩提に至る道を示されたので、この上ない喜びを長者窮子の譬えをもって示します。そこで説かれる「窮子」も、法華經を教えて貰う以前の四大声聞のように「志意下劣」でありました。「信解品」の「信解」とは、この「志意」を指しています。(この長者窮子喩に基づき、まず始めに、私たちは本当に成仏を目指しているのでしょうか、すなわち、私たちは法華經を本当に受持っているであろうか、ということについて考えたいと思います。

私たちは、法華經を教えてもらう以前の四大声聞と違って、法華經の素晴らしさをすでに知っています。そして、日蓮聖人が弘めて下さったお題目を受持し、法華經の本化の弟子として真に法華經を受持してそれを弘める役割を担っています。しかし、実際はどうでしょうか。言葉では法華經は素晴らしい、私たちは成仏できる、といいながら、実際には成仏とは程遠い生き方をしてはいないでしょうか。法華經を心から信じて受持し、本当に成仏できると確信して、そこに向かって自らが邁進しているでしょうか。そのようなことについて、議論して「懺悔」することを、第一の問題提起としたいと考えます。

次に、法華經に出会えた喜びについて考えることを、第二の問題提起といたします。「無上宝聚不求自得」とあるように、四大声聞は気づかないうちに大きな宝を譲られていました。しかし私たちは果たして、譲られた宝の素晴ら

しさに気づいているでしょうか。法華経に巡り会えた喜びと感動について、どのように受け止めるべきか、その感謝と感謝を今もたもっているか、ということなどを問い直し、確認したいと思います。また、喜びと感動の根底には、法華経でなくてはならないという強い信念と、成仏への確信があると思います。したがって、法華経を受持することのできた喜びについて深く考察するためには、なぜ法華経でなくてはならないのか、法華経で成仏するとはどういうことなのか、などということであらためて問い直すことも必要でしょう。そのようなことについて、それぞれの参加各聖の立場からも語っていただき、活発な議論が行えればと思います。また、「窮子」さながらに志意（信解。心の傾向）が未熟で、懺悔すべきことの多々ある末法の衆生たちでさえも、必ず残らず成仏できる、ということが法華経の偉大さの所以であり、本師釈迦牟尼仏の広大なる慈悲を表しています。そのような観点からも、法華経の素晴らしいさと法華経に出会えた喜びをあらためて確認したうえで、議論を通じて、現場で人々に伝えていくための実践的な言葉を探していくことを目指します。（以上『第四十九回中央教化研究会議』資料所収、問題提起「第1分科会〈現代教化学部門1〉長者窮子について」より）

② 「長者窮子喩和訳」

問題提起に続き、助言者の鈴木隆泰師が作成された「長者窮子喩和訳」を配布し、運営が音読した。日蓮聖人が生身として法華経に向き合われた姿勢を追体験するという意図のもと、「信解品」長行の梵文からの和訳をテキストに、参加者一人一人があらためて法華経の長者窮子喩を読解し、その内容を再確認した。

③ 長者窮子喩の感想

討議の端緒として、参加者それぞれが長者窮子喩のどのような点に特に着目したか、ということの確認を含めて、

参加者全員に感想を求めた。

それぞれの感想のポイントを以下に列挙する。

- ・他の譬喩に比べて成仏というテーマが強く反映されていると感じた。
- ・長者と窮子が、現代のお寺に生まれた僧侶とその子供と重なる。世襲する今日の師弟の關係に置き換えられるのではないかと感じた。
- ・寺院の世襲を考えるうえで大切な内容と感じた。父親から財産を譲り受けることは、法灯継承と重なるのではないか。
- ・財産を譲られたあとの息子の話が気になる。話があっさりと終わっているのは、「気にさせる」ことにより「得た後を考えさせる」という手法ではないのか。
- ・財産を譲られた窮子が長者のあとを継いでいくことまで説かれていないが、財産を得たことが成仏で不退転なのか、そこまでいけば退かないのか。また増上慢はないのか。
- ・最後に財産を得たと終わるのが不自然に感じる。息子が得た一番大切なものは財産ではなく父親ではなからうか。また二十年間ともに汚れ仕事を頑張った仲間も得たであろう。つまり、心の拠り所を得たということが大切なテーマではないかと感じた。
- ・五十年間の息子の放蕩について、五十年という年月に何か意味があるのではないか。遠回りには意味がある。この五十年は偶然ではなく、必然ではないか。
- ・長者はお釈迦さま・僧侶という育てる側（能化）。窮子は一般の人々・檀信徒など育てられる側（所化）に置き換えられると感じた。しかし、財産（お題目）は譲られるだけのものではなく、誰もが譲る側にもなるべきであり、

そのような教訓は含まれていないのか。また我々僧侶（能化）も、本仏釈尊や祖師様に導いていただく窮子（所化）であるので、長者と窮子は重層的な関係である。

こうした感想や疑問のうち、いくつかについては鈴木隆泰師による解説やコメントがなされた。

「五十年という年月に何か意味があるのではないか」という疑問に対しては、ある事象が起きたときに、それは偶然ではなく必然と受け止めるのが宗教である、というコメントがなされ、五十年の遠回りは法華経に出会うために必要なものであり、大いに意味があるということを確認した。加えて、「窮子の二十年・三十年・四十年・五十年の放蕩の示すところは輪廻の話である」、「全てのことを今生でつじつまを合わせるのではなく、過去・現在・未来の三世の考えを持つことが大切」という含意があるということも解説がなされた。

また、法華経の物語は、基本的にはインド人の世界観の中にあることに注意が喚起された。インド人の世界観という点については、寺院の世襲について考える際、インド思想ではカースト制度の影響が多であることに留意して譬喩を読み解く必要がある、ということも指摘がなされた。

そして、窮子が長い年月をかけて仕事という苦勞をして財産を得たという構成は「歴劫修行」を表わしているという点も詳説され、参加者の長者窮子喩への理解を深めることができた。

三、分科会討議

分科会討議では、「長者窮子喩和訳」をもとに、いくつかの主題を抽出して討議するという運びになった。参加者で検討した結果、「歴劫修行の成仏」について考察することとなり、その上で今日の我々の現場における成仏の問題（靈山往詣することを成仏とする葬儀、頓悟の成仏と年回忌法要についてなど）をどのように考えるか、ということ

が議題の中心となった。根本にある問題意識としては、教学と現場をいかに繋げるか、ということであり、参加者各々の実体験を披瀝してもらいつつ、活発に意見が交わされた。以下、各内容別に項目を立て、主な意見を列記する。

【歴劫修行の成仏と現在の成仏の問題、ならびに成仏観について】

※歴劫修行による成仏をどのように考えるか。また、法華経で成仏するとはどういうことか、参加者それぞれの成仏観について述べてもらう。

- ・法華経では即身成仏を説く。人間の考えの中では歴劫だが、仏さまの中では時間軸（過去・現在・未来）や、時間の観念が違うのではないか。
- ・法華経の成仏と葬儀の成仏、二つをそのまま受け入れることに日本人は抵抗感を感じないのでは。日本には葬送の文化があり地域ごとにも特色がある。また日本人独特の死生観もあるので、法華経の成仏と葬儀という「成仏」は区別して考えてもいいのではないか。
- ・歴劫修行による成仏と霊山往詣を切り離れた方が分かりやすいのではないか。
- ・「釈尊と同じになる」ということが、成仏なのか。
- ・葬儀の時には成仏とは説いていない。そして、輪廻というよりは転生を説く。転生によって魂のステージをあげていくために供養をするとすれば、歴劫修行と重なっていく。
- ・霊山往詣、お釈迦さまのもとに旅立ち、法華経の会座に加わる。
- ・年回忌にもつながるが、仏にも位があるので、供養を重ねて仏の位をあげていく。
- ・信解をより善い方向にもっていくことが成仏であり、私たちの中心は題目受持である。法華経の素晴らしさを教え

ることと重なる。お題目を唱えましようと呼ぶ時、その方にとっては功德があるから、双方にとつての信解を進めるものだと思う。法華経でなくてはというのは自明の理である。一緒に成仏への道を一歩一歩、いったんご破算にしても良く、昨日休んだから今日こそはと、そういう感じで繰り返し繰り返し進んでいく。その芯にあるのは題目受持である。

・お寺の作業を手伝ってくれたお檀家さんから「これで成仏できるか？」と聞かれた時、「これで成仏できるなら、私は明日はもう何もしないよ」と言ったことがある。これでこのまま成仏できると言ってしまうと増上慢になってしまうと考えた。

【年回忌の意義について】

※故人が霊山の会座にいると考える時、法事の意味をどのように檀信徒に説いているかについて意見を求めた。

・ご先祖様を大事にしていくことを伝えている。

・法事をする人は葬儀屋などが間に入っているので、作業のように淡々と行う人もいる。合掌をする習慣がないので、法事で合掌を促しても何に手を合わせているか分からない人も多い。また、数珠さえも持っていない人が多いのが現状。

・合掌の意味を子供たちに伝えられない。

・普段は法華経の会座にいるが、法事の際には皆さんを上から見ているという話をする。

・法事の意義を檀信徒に説いたことはない。

・法事はただの儀式になっている。信仰を根本的に説明する必要があると感じる。

【法号について】

※長者窮子喩の中で「長者が窮子に財産を授ける」とこと、「僧侶が故人に法号を授け、教誡を与える」ことは同じではないかとの視点から、参加者に法号をつける際の考え方を求めた。

・「こう生きて欲しい」とつけるのが名前であり、「このように生きました」と授けるのが法号という話をする。
・枕経で故人のことをお聞きする。どのように生きたかだけでなく、仏としてどういう風になって欲しいかを絡めて法号をつけている。

・一度に五通りの法号を考え、選んでもらう。

・「如来を肩に背負う」という気持ちで葬儀を行う。法号はたまたま自分が考えたものだが、如来の（ハタラク）として感応道交して、如来が自分を使って法号を授けているという気持ちでつけている。私がつけた法号も如来の力。
・法号を百年後の子孫が見ても、その人のことが分かるようにつける。そのために徹底的に取材する。また、お経文は仏であるから、お経文から漢字を必ずとり、お通夜の席で必ず説明する。

・法号を見て、生きている人がその人を想像することが大切だと思う。どうように生きた人か分かるようにつける。それが先祖を思う心になる。

四、まとめ

以上の分科会討議の結果、次のことが確認された。まず、僧侶は長者窮子喩の窮子であるとともに、如来使であるということ。そして、法華経の前半で釈迦如来が記別を与え成仏を保証したように、僧侶は如来使としての自覚を堅持し、如来になりかわって法号を授け教誡を渡すことが肝要であること。その如来使の自覚とは、「如来を肩に背負

って」という姿勢、すなわち葬儀や引導は、「している」ようであり、実は如来使として「させて頂いている」という心構えで執り行うことが何より大切であることを確認できた。

五、おわりに

第Ⅰ分科会では長者窮子喻をテーマに二日間にわたって討議が行われた。現場での布教と教学をいかに近づけるかを根本的な問題意識とした上で、僧侶はどのような心構えで葬儀に臨み、法号を授けるべきか、ということについて具体的なあり方を見出すことができた。

議論の内容は、歴劫修行や成仏論といった教学的内容から、現場における教化学的内容まで幅広いものであった。教化学的内容については、積極的に意見交換がされる一方で、教化学的内容では議論が発展しにくいということが窺えた。教化学的内容について意見を述べ合う際は、参加者を少数ごとのグループに分けることで議論を深められることが考えられ、運営における工夫を見直す必要を感じた。

第Ⅱ分科会

虚空会について

座長 藤崎善隆

模範説教 中井本蓉

問題提起 蓮見高円

助言者 蓑輪顕量 石川浩徳

記 録 本間文裕

運 営 齋藤宣裕 灘上智生 渡邊英晃 木村匡宏

一、問題提起

見寶塔品に始まる虚空会には、摩訶不思議なシーンが数多く描かれています。地面より湧き出て空中に浮かぶ高い塔。十方から集まる無数の分身仏。娑婆世界は三度も拡大されて無限に広がる浄土になる。釈尊は空中へと飛び上がって虚空に留まり、会衆も虚空へ引き上げられる。遙か昔に死んだ仏が大音声を出し、永遠と思える時間が半日程度にしか感じられない。地の下の虚空より湧き出て来る無数の菩薩たち。師の釈尊より遙かに昔から修行してきたという弟子たち……。

私たちは、それを文字通りに受け止めれば、それで良いのでしょうか。私たちは、学問的理解に安住して、虚空会が表している教えや描かれた意義などを、真剣に考えてこなかったのではないのでしょうか。

また、現代の私たちが教化して行かなければならない対告衆は、虚空会どころか法華経の内容すらほとんど知らず、檀信徒の後継者だったとしても未信徒同様の人が増えていくことでしょう。虚空会など、荒唐無稽なファンタジーとみなされてしまいかねません。

かつて鎌倉時代の日蓮聖人は、法華経を自己に向けて書かれた經典であると「納得」しました。現代の私たちも、他人事として上辺の理解に留まるのではなく、現代の自分の事として「納得」する必要があるでしょう。

勿論、解釈や受け止め方は、人により千差万別です。当然「信仰なのだから、文字通りの奇跡が起きたのだと信じれば良い」という意見もあるでしょう。哲学として分析する方向性もあります。あるいは、法華経が作成された時代や地域の背景から解釈するというアプローチも可能です。經典作成者が、何かを伝えたいが為の誇張表現であるという解釈もありえるでしょう。

第二分科会では、一日目に、虚空会を自分自身がどう理解し受け止めているのか、虚空会が伝えようとしている「思い」が何であるのかを話し合いたいと思います。なぜ、前霊山会から虚空会に場を移す必要があったのか。なぜ、様々な不思議な現象が描かれているのか。またなぜ、理想の浄土である虚空会に留まらず、娑婆の後霊山会に戻ったのか。数々の「不思議」を、現代に生きる「自分自身」の問題として、捉え直したいと思います。

二日目には、私たちが自分自身の問題として捉え直した虚空会を、いかに他者に伝えれば良いのかを検討したいと思います。どう伝えれば、現代の若者達を納得させることが出来るのでしょうか。法華経を全く知らない未信徒に、どうすれば伝わるのでしょうか。未信徒でも納得出来るような「説得力」を編み出したいと思います。

二、分科会議検討

一日目

始めに、問題提起者より法華經の虚空会に関する部分の概略が語られ、引き続き前述の問題提起がなされた。一日目はその問題提起に従い、虚空会を自分自身がどう理解し受け止めているのか、虚空会が伝えようとしている「思い」が何であるのか、法華經に説かれる数々の不思議を現代に生きる自分自身の問題としてどう捉え直すのかということ話し合った。

その為にならず、三つの分散会（各六〜七名）に分かれ、各分散会で法華經の虚空会に描かれている不思議なシーンを二つ以上ピックアップした。

次に、それを自分自身としてどう受け止めているのか、何故そのような記述（表現）が必要だったと考えるのかを討議した。

また、各分散会の意見を纏めるために、60 cm × 80 cm のライティングシートを用意し、上部には「不思議なシーン」を、下部にそれに対する解釈を書いた。それを壁に貼り付けることで、他の分散会の意見を把握しやすくし、議論を深めて分科会全体の意見をまとめた。

○なぜ虚空会に移す必要があったのか？

- ・ 時間と空間を超越するため。それによって凡夫と本仏との繋がりが得られる。
- ・ 虚空会は死後の世界であり、霊山浄土を一度皆に体験させるため。
- ・ 見えない一人一人に与えられた大事な事を伝えるには虚空会という形でしか表現できなかったのではないか。
- ・ 地上と虚空の対比によって、現実と理想の世界を表現した。

・虚空という言葉は限定されない広大なる永遠なるものという意味。虚空会というのは現実の世界から悟りの世界に入ることを意味する。悟りの世界が、時空を超えた永遠なものであることを象徴している。

・分身の諸仏が出てきているが、悟りは遠くのほうにあるのではなく、身近なところにあるものというテーマを提示しようとしたのではないか。

・分身で様々な人種を表現した。

・身分制度のある場所に新しい空間を作ること、差別の見方を変えようとした。

○なぜ多宝塔が現れたのか？なぜ多宝塔は大きいのか？空中に浮かんだのか？

・過去世（久遠の昔）からの教化を表すため、過去仏の多宝如来が現れた。

・過去から現在に繋がる説法を証明することで、未来に向かう常住説法の証明として必要であった。

・時空を超越したものであることを表現するため。

・法華経の偉大さ、正しさを証明するため。

・中々信じられない人たちを信じさせるために現れた。

・ビックリさせるため。

・価値観を変化させるため。

・理想だけでなく現実の世界を表している。

・大きくて空中に浮かんでいた多宝塔を大衆は下から綺麗だと思いついていたが、お釈迦様が空中に連れて行ってくれたということで観念だけで終わるのではなく自分たちも現実世界でも綺麗な世界に行けるということを象徴している。

・ストウパーはお釈迦様の遺骨を入れるということから基本的に仏そのもの。つまり、釈尊が言ったことを別の仏

さまが証明するということになる。

○なぜ地涌の菩薩なのか？他の仏弟子・菩薩では駄目なのか？

- ・どこか遠くにいるに在る仏弟子・別世界の菩薩ではなく、私たちの身近に在る地涌の菩薩こそ大事であるから。
- ・悟りの世界というのは実は私たちにとつて、とても身近なものであるということ伝えようとしたのではないか。
- ・地から涌くということは、地面の下で耐え忍んで修行してきた菩薩たち（忍辱の修行をしてきた菩薩）であることを表現している。

・地涌の菩薩は三十二相を備えており、法華經の弘教を任されるに値する存在である。

○なぜ本化の菩薩が居るにも関わらず、先に迹化の菩薩に弘教を募つたのか？

- ・様々な値難があると分かつた上で、弘教する覚悟があるか尋ねる意味で募られたのではないか。

○なぜ虚空会に留まらず、靈鷲山へ降りてきたのか？（後靈山会）

- ・教えを再確認するため。
- ・教えの素晴らしさを發揮するため。
- ・虚空会でお釈迦様から上行菩薩への付嘱が終わつて、地上で教えを弘めるため。
- ・法華經の虚空会は『ドラゴンボール』の精神と時の部屋で時間を超えて修行するようなもの。世界を救うためには、外に出なければならぬ。

二日目

追加の問題提起

一日目は法華經を自分自身の問題として捉え直しましたが、釈尊から付嘱を受けた我々はそこで満足せず、人々に

その法華經を弘めなければならぬのです。では、どう伝えれば法華經を全く知らない未信徒や現代の若者に納得してもらえるのでしょうか？

私は法華經という物語の中にそのヒントが隠されているのではないかと考えます。序品に「過去に仏が法華經を説いた」と書かれています。もし、その「法華經」と一部八卷二十八品の經典の形の法華經が同じものだとするならば、「過去に仏が説いた法華經」に「過去に仏が法華經を説いた」と書かれていることになり、矛盾が生じます。これはすなわち、法華經は、一部八卷二十八品以外の形式があるということではないでしょうか。例えば、常不輕菩薩は、經典の一句も知らず、ただ礼拝をし「私はあなた方を軽んじません。貴方たちは必ず仏になるからです」と言うだけでした。つまり「經典の形をしないでなくても、誰も軽んじない振る舞いこそが法華經であり、それを行うことが法華經を行っていることになる」ことが示されているのだと、私は解釈しています。

つまり、一部八卷二十八品の法華經以外の「ものがたり」としても法華經はあり得るし、究極的には經典ではなく、但行礼拝のような行動の形でも、「法華經」というものが存在し得るのだと、法華經自体が教えているのだと、私は解釈しました。

これを踏まえて二日目は、昨日とらえ直した「虚空会」を、いかに他者に伝えれば良いのかを検討して頂きたいと思います。法華經を知らない未信徒でも、法華經を信じない人でも、納得出来るような説得力のある、あたらしい「ものがたり・法華經」を、皆様と一緒に話し合っつて、編み出していきたいと思えます。

右記の問題提起に従い、一日目と同様に三つの分散会に分かれて討議した。

○虚空会はファンタジー？

- ・ファンタジーだからこそ興味を持ってもらえる。
- ・あくまでたとえであり、フィクションかどうかは大事ではない。そのたとえ話で何を伝えたいのかが大事。
- ・虚空会は時間と空間を超えた繋がりを表現している。過去から未来へと繋がる生命の繋がりを説く。

○現状

- ・お参りに来る人のほとんどは先祖供養が目的。それに応えて先祖供養をすることも大切だが、僧侶としてはもつと「生きている人」に目を向けるべき。
- ・「何となくありがたい」という気持ちは宗教的感動として大切だが、そこで満足してはいけない。その先が大事である。

○ではこれからどうすれば良いか？

現代風の例え話で教えを説く

- ・先祖供養はラインのようなもの。目の前にいない人、知らない人ともつながる事が出来る。
- ・神力品で如来の神力で聴衆が歓喜したのはAKBのライブのような感じ。

空間作り

- ・本堂を含む境内で浄土を表現する。
- ・庭をきれいに掃除することで宗教的空間を体感できるようにする。
- ・法要で浄土世界（虚空会）を表現する。

縁作り

- ・先祖供養以外にも、諸行事で足を運んでもらう。

- ・寺に籠らず、社会に出て縁を作る。
- ・近所の人などと私服での付き合いの中で、何気ない話から布教する。
- ・寺子屋活動。
- ・手紙で毎月法話を郵送。
- ・病院で終末期の患者に授戒をすることで家族より感謝の言葉を貰えた。

僧侶の資質の向上

- ・直接日蓮宗事典に書いているような「虚空会」を話さなくても、たとえ話や行動で説明して伝える。
- ・教えを説く我々がまず教えの素晴らしさをしっかり学び理解する。
- ・多人数でも雑にならず、少人数でもあなどらず、それぞれに真摯に対応する。
- ・人々と一緒に寄り添うことが大事。
- ・釈尊の付嘱を受けた僧侶として、法施を行う側としての人間力を増す。

二二、まとめ

なぜ、前霊山会から虚空会に場を移す必要があったのか。なぜ、様々な不思議な現象が描かれているのか。またなぜ、理想の浄土である虚空会に留まらず、娑婆の後霊山会に戻ったのか。これまであまり考えることのなかった虚空会のシーンの意義やそこに描かれた教えを考えることで、私たちは地涌の菩薩の一員としての自覚を新たにすることができた。

また法華経に説かれる数々の「不思議」なシーンは、現実離れたドラマチックなものであるが、それゆえに現代の人々を惹き付ける、魅力を持っているともいえるだろう。現代を生きる未信徒を教化するためには、まず私たち自

身が法華經の尊さや素晴らしさを学び直し、この法華經の「不思議」を自分自身の問題として捉え直さなければならぬ。そしてそれを元に、教化する力に磨きをかける、教えを説く空間を整備する、寺に籠らず社会に出てご縁を結ぶといった、日々の地道な努力を積み重ねることこそが重要なだと改めて気付かされた。

四、運営方法について

今回は、第二分科会を更に、三つの分散会に分けた。これにより単純に参加者の発言の機会が三倍になった。また少人数にすることで、より話しやすい雰囲気になり、多数の発言が得られた。

反面、各分散会の意見を交換する事が難しくなった。そこで、ライティングシートに意見を書いて壁に張り出すことで、各分散会の意見を全員が見えるようにした所、意見が集約しやすかった。

課題としては、分散会が増える分、各分散会の議論をリードする人材の確保が重要だと感じた。

第三分科会

龍女成仏について

座長 鶏内泰寛

模範説教 松田英秀

問題提起 津幡法胤・延本妙泉

助言者 星 光諭

記 録 鈴木是妙・坂輪宣政

運 営 山田孝行

一、運営について

第三部会においては、一日目は、一グループ五人で四つの島を作り、その中で意見を出し合い、代表者が発表する形をとった。少人数のため意見が比較的出やすく闊達な議論が展開された。

二日目は、グループごとにマンダラート法を二回重ねて行う方法を用いた。最初のマンダラート法で出された意見の中から、グループごとに異なるものを一つずつ選び、それを二回目のマンダラートの真ん中に配置し、さらに枠を埋める作業をすすめ、その結果を各グループの代表者が発表するという運営方法をとった。この方法により、一度目に出された意見がさらに掘り下げられ、より議論を深めるために有効な手段であるとの手ごたえを得られた。

二、問題提起

「われわれの宗教によれば、あなたは今の姿では極楽に行けない。その前にいったん男に生まれ変わらなければならない」。一九六六年にフランスの哲学者サルトルとその妻シモーヌ・ド・ボーヴォワールが来日して高野山に足を延ばした際にある密教の僧侶がボーヴォワールに語った言葉です。このように「変成男子」を文字通りに受け取って、「変成男子（仏教）は女性を蔑視している」と考えてしまう人は少なくないでしょう。

古来からインドではヒンドゥー教の教義に基づくカースト制度の考えが深く根付いており、そのなかで女性の立場は男性に比べるとはるかに低いものでした。『マヌ法典』をはじめ、インドの文学書や法律書では一貫として「女性とは不浄・邪悪・軽薄・淫らな存在である」と説いています。そんな女性観が当たり前だった時代において、釈尊は男性や女性の性別に関わらず平等に教えを説かれました。教団内では女性修行者がバラモンの行者に対して堂々と教えを説いている姿などが見られ、当時インドを訪問したギリシア人のメガステネスも自身の旅行記のなかでその驚きを記しています。

しかしながら、釈尊滅後になると、教団内において釈尊の神格化とヒンドゥー社会の思想が徐々に強まってしまい、部派分裂の時代になると出家優位や女性蔑視の考えが特に顕著になりました。そんなとき再び釈尊の原点に還ろうとしたのが「大乘仏教」でした。

『首楞嚴三昧經』や『維摩經』、そして『法華經』などの大乘經典では「女人成仏」に触れ、小乗仏教の女性蔑視に対して異議を唱えました。そして、この中でも最も優れた「女人成仏」が『法華經』に出てくる「龍女成仏」です。娑竭羅龍王の娘がわずか八歳にして、龍身・年少・女性という身でありながら、文殊師利菩薩が説く『法華經』の教えによって即身成仏したわけです。

我々は龍女成仏を自分のこととして考える時が来ているのではないでしようか。そこで、本分科会ではまず『法華経』で説かれる「龍女成仏」についても一度整理したあと、現代社会で起こっているジェンダー問題を考えます。

時代は変わり、時代は新たなジェンダー問題に直面しています。LGBTの問題もその一つです。LGBTとはレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル（両性愛者）、トランスジェンダー（心と体の性の不一致の者）の頭文字をとった総称であり、今注目されるジェンダー問題です。

海外布教の現場では「あなたの宗教では同性婚を認めますか」という問い合わせが多く寄せられています。日本では、E M A 日本（いーまにつぼん）という団体が近年発足し、性的マイノリティーが差別されない日本社会、多様性が受け入れられる日本社会を作ることを目指しています。それによれば、同性婚や登録パートナーシップなど同性カップルの権利を保障する制度を持つ国は世界で約二〇％にも及んでいません。アジアではタイ、台湾、ベトナムにおいて同性結婚法案が国会で審議されており、ベトナムでは二〇一五年一月一日から同性同士で結婚式を行うことが「禁止」から「容認」に改定されるという動きが見られます。

一方、日本では、日本国憲法第二十四条一項に「婚姻は両性の合意のみに基づいて成立し」と記載され、結婚は夫と婦（妻）両性のものだとして明記されています。しかし、電通ダイバーシティ・ラボの調査によれば、日本でLGBTに該当するのは七・六％（十三人に一人）であり、LGBTの人たちが占める市場規模は五・九四兆円にも昇っており、もはや国内でも無視できない問題となっています。この問題に早く反応した企業がソフトバンクです。ソフトバンクの家族割は二〇〇七年の導入当初から同性愛者が同居している同性パートナーであっても利用できます。近年では二〇一五年十一月五日、行政として全国で初めて東京・渋谷区が同性カップルに対し、「結婚相当の関係」と認める証明書の発行を行いました。

以上のように、国内外においてLGBTの人たちを巡る社会的な動きが急速に進んでおり、私たちは新たなジェン

ダー観に対して考えなければいけない時代になってきています。我々僧侶もLGBTに関わる実際のお寺の現場で起こった問題や起こりうる問題について議論を交わしながら、問題意識を共有していくことが必要ではないでしょうか。

問題提起を受け、まず初めに、法華経の中でも最も優れた女人成仏が説かれている提婆達多品の『龍女成仏』を取り上げ、変成男子の正しい理解を参加者全員で改めて確認する作業をおこなった。それを踏まえ、現代社会に於いての龍女とは誰なのか、というところに観点を置き、女性のみならず、すべてのマイノリティーの置かれている状況、中でも特に最近マスメディアなどでも新たに注目されてきているジェンダー問題、LGBT（レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー）についての情報や認識を共有する場として議論を深めた。

第Ⅲ部会への参加希望者は申し込み段階で定員を超え、この新たなジェンダー問題を各教師が、僧侶、寺院、宗門として早急に向き合うべき課題と捉えており、重要なテーマとして認識していることも明らかになった。

一日目

○模範説教

参加者による討議に先立ち、現代宗教研究所 松田英秀嘱託により、提婆達多品について模範説教頂いた。紙芝居風の挿絵を取り入れた、檀信徒・未信徒向けのわかりやすい形式で披露された。平易な言葉を用い、地理的・宗教的要素をはじめ当時のインドの時代背景、特に女性の置かれた厳しい立場についての説明も織り込み、そのうえで前半の悪人成仏、そして後半の女人成仏についてのチャプターが語られた。それぞれの場面の登壇者の立場を丁寧に解説した上で、大変分かり易く組み立てられた法話に、参加者全員新鮮さを感じつつ真剣な面持ちで耳を傾けていた様子が見受けられた。

法華經にあらわされているさまざまな文言や教えが、誰によって誰に向けられたものなのかを（挿絵）という視覚的要素を取り入れることでより理解し易く、布教活動のツールとして大変参考になる良い試みとなった。

○『龍女』『舍利弗』それぞれの視点から

「提婆達多品」の法話を受けて参加二十名の教師が、五名ずつ四つのグループに分かれ、二グループが「龍女」と「舍利弗」の立場に立って『龍女成仏』についての考えを出し合った。

【龍女の視点から】

- ・龍女は女性というより、当時のインドで差別されたすべての人ととらえるべき。年少（一例として八歳までは胎児と同じにみなされるといふ説もあり）、畜身、女性ということそれぞれすべてを表しているのではないか。
- ・宝珠とは自分のすべて、命、信心のことではないか。
- ・学、無学によらず、信心の深さは知識を超え、それを捧げることにより、すでに龍女は即身の成仏が叶い不退転の境地に至っているという点が肝心ではないか。
- ・龍女の成仏は（甚だ疾し）の文言から、歴劫修行を重ねた成仏でなく、未来授記でもなく、即身ということが重要である。
- ・年少という姿から、純真さや歴劫修行していないことを読み取ることもポイントではないか。

【舍利弗の視点から】

- ・小乗、阿羅漢の最上位にして智者の代表である舍利弗が、あえて悪役として登場するのは、龍女の成仏に説得力を

持たせるため、すべて理解したうえで、あえてアンチテーゼとしての役割だったのではないか。

・当時のインドの人々（感性）が女性の成仏を受け入れるには、「変成男子」という劇的なシーンや、舍利弗らが黙然として信受するというくだりは必要。

・対機説法のひとつとして描かれているのではないか。

一日目の議論を交わすなかで、参加者から日常法務において提婆達多品を読誦する機会が少ないこと、また内容について深く意識したうえで檀信徒に伝えていないことなどを反省する声が多く聞かれた。

二日目

○データ・資料提示・補足説明

冒頭に座長より、LGBTに関する具体的な二・三のデータ、法律、国際的な流れに関しての資料が示され説明がなされた。それに続き現時点での参加者の経験事例や見聞事例の発言を求めた。

「身近にいるのかもしれないが、実際に接したことはない」、「話題にすることさえ受け入れられない世代がある」、などの発言から始まったが、次第に参加者からは、データから見れば、全人口において左利きの人や血液型AB型の人とほぼ同割合ということであれば、やはり確実に身近にある問題としてしっかり考えることが必要だと認識されたようだ。

そこで座長より再び、世界保健機構（WHO）が疾病分類で「同性愛はいかなる意味でも治療の対象とはならない」（一九九〇年）としていることや、「（行政は同性愛者について）無関心であったり知識がないということは公権力の行使にあたるとして許されない」などの日本国内の裁判例が示され、日本においてのセクハラ方針改正（同

性間が明記 ※二〇一四年）、オリンピック憲章の差別禁止規定（性的指向を明記 ※二〇一四年）、世界各国の同性結婚の合法化の流れも合わせて説明がなされ、あらためて参加者による討議に戻った。

○経験実例

一、娘さんがトランスジェンダー（身体が女性で心が男性）の家族からの相談の事例が紹介され、本人の苦しみは周囲の想像を超えること、父親との関係が良くないこと、タイでの性転換手術、タイにはコーディネーターもいること、日本では性転換に関しての規定条件が厳しいことなどが示された。本人と接する時には興味本位にならぬよう気遣いを心がけているが、理解というより、本人のことをあるがまま受け入れることが必要との進言があった。

二、葬儀に際してトランスジェンダーの方の法号について、本人の希望通りの性の法号を授与するのか、遺族の希望のする性の法号にするのかという難しい選択を迫られるという事例が挙げられた。

○実例に対する意見

- ・当事者の希望も重要だが、法号については社会の中でまだまだマイノリティーであることを考えると、葬儀の喪主である遺族への心遣いも当然必要となる。
- ・カミングアウト出来ない子どもも社会は、より深刻な問題として扱わなければならない。
- ・身近にいつも青いジャージを着ている女の子がいるが、自分の子どもがその子にどのような接し方をしているのか心配。

- ・学校内で男女問わず呼び方を「さん」付けにするのは、良い方法ではないか。

○マンダラート法にて

A 再び五人ずつ四グループに分かれての作業。

一つの問題についてより掘り下げていくためにここでマンダラート法を用いた。一枚目作業は、各グループ三×三の九マスの真ん中に『寺院におけるLGBT』という共通のテーマを置き、周りの八つのマスを意見で埋めていった。

B 次にそれら意見の中から、他のグループと重ならないものの一つずつ選び、各グループ二枚目の九マスの真ん中に配置する。そのテーマについても同じように意見をマスに書き込んでいくという手順。その結果、四グループにより四つのテーマについて意見が取りまとめられた。

A 寺院におけるLGBT問題

- ・法号（戒名）の性別問題
- ・同性婚、結婚式
- ・参籠部屋、トイレ等（施設）問題
- ・宗門修行機関問題
- ・相談助言（知識・情報・法律）問題
- ・相続（墓・祭祀・財産）問題

- ・寺院（住職・後継者が当事者・檀信徒の理解）
- ・厄年、読み上げ（性別）問題
- ・教化法（教義）

B…四つテーマ（喫緊に必要となり得る）

①「戒名」グループ…

- ・生前に法号を授け安心してもらう。（家族の理解への働きかけが必須）
- ・俗名で葬儀を執り行うにしても遺族の気持ちへの配慮が必要。
- ・宗門で性別を超えた新しい位号をつくる。新たな差別を生み出さないような、いずれ当たり前になるような位号が必要。

②「教師自身の認識・知識」グループ…

- ・研修、講演、書籍等により、どのような対処方法があるのか、法律的にはどのような対処法があるのか知識として持つことが大切。
- ・当事者本人、家族との対話が必要と思われるが、個人的に機会を設けることは難しく、宗務所・宗門単位で活動団体などから当事者、講師を招き現実の認識や対処法の知識を深める場が必要。
- ・実際に我々が相談を受けた時、教師、住職としての対応と、別の状況で個人として接した時の対応が果たして同じにできるだろうかという不安。

- ③「教師として相談を受けた時の対応」グループ…
- ・寺院、宗門等でガイドラインを作る。
 - ・書籍、講演などで正しい知識を深める。
 - ・紹介できる専門家、専門組織とのつながりを持つ。
 - ・檀信徒間の理解（偏見をなくす）を得るための対処法。
 - ・墓（供養）、祭祀、家、後継問題への指導。
 - ・家族、親族への対処。
- ・一番大事なことは、教師が法華経をよりどころとして教義的根拠、解釈をもとにこの問題に対処することではないか。

④「教義的根拠」グループ…

- ・提婆達多品において描かれる当時のインド社会で差別された女性に象徴される立場は、現代のLGBTを含めたすべての差別を受けている人々と置き換えることができるのではないか。すなわち、提婆達多品での「龍女成仏」の教えにより、現代社会においてマイノリティーとして差別されるすべての人々の成仏は間違いなく保証されているということが重要。

三、まとめ

二日間にわたり参加各上人の協力を得て、本年の中央教化研究会議において第Ⅲ部会が掲げた、「提婆達多品の『龍女成仏』を改めて確認したうえで現代社会の新たなLGBTというジェンダー問題についての議論を交わし問題

意識を共有する」という目的は果たせたのではないかと思われる。多くの企業ではすでに人権問題としてさまざまな取り組みがなされ、また市場としての規模も大きいことから、近年にわかに注目されているLGBTだが、デリケートな問題ゆえにおおやけに取り上げられる機会はまだまだ限られている。そのため、教師、寺院として現実問題に直面した際の対応に窮することも危惧されることから、今年度の第Ⅲ部会のテーマとして取り上げたことは適切だという発言もあった。

「生まれによって賤しい人となるのではない、生まれによってバラモンとなるのではない。行為によって賤しい人にもなり、行為によってバラモンとなる」（スッタニパータ）そもそも釈尊は、生まれつきの生物学的な特徴は認めても、性差の対立、人間の在り方としての差別は認めていない。釈尊の平等観は性差を超えたものであり、のちに歴史的、社会的、文化的に形成され言語化されたジェンダーの偏見にとらわれることなく、すべての人々を人間としてあるがままに見るということに立脚している。仏教は男女の違いよりも「人間として何をするか」ということを重視している。

「末法にして妙法蓮華經の五字を弘めん者は

男女はきらふべからず」（諸法実相抄）

「龍女が成仏此れ一人にはあらず一切女人の成仏をあらわす」（開目抄）

日蓮聖人も遺文の随所に、成仏には三千大千世界と同じ価値を持つ純粹な信心「宝珠」をもっていることが最も重要であるとお示しになっている。

今回第Ⅲ部会では、提婆達多品の『龍女成仏』をあらためて取り上げ、「龍女」を差別されているすべての人々ととらえることで、性別・性的指向を超えたすべての人々の成仏の保証を確認することができた。そのことにより、何よりも私たち日蓮宗教師は、LGBTをはじめとする新たなジェンダー問題への取り組みにあたり、教義的な根拠と

してこの提婆達多品を通し広く説いていくべきであるという使命も自覚することとなった。

日本は二〇一四年に「LGBT人権後進国」として国連人権委員会から勧告を受け、「世界男女格差レポート」（二〇一三年）によると男女格差についても世界百三十六カ国中一〇五位、発展途上国並みという現実がある。その日本において我々には、一切衆生の成仏を説いた「一仏乗」という平等思想をうたう『法華経』をよりどころとする宗門の教師としての働きが必要とされよう。

第Ⅳ分科会

良医治子について

座長 岩田親静

模範説教 池浦英晃

問題提起 河崎俊宏

助言者 田澤元泰・中村潤一

記録 小林康洋・原一彰

運営 石原顕正・野村佳正

一、運営について

第Ⅳ分科会は参加者三十一名。参加者の出欠確認及び、自己紹介はごく簡単に留め、早速、問題提起、模範説教を行った上で、分科会討議へと誘った。模範説教は、プロジェクトを使用し、重要箇所と思われる点を明示しながら、参加者が単純に聞くだけでなく問題の可視化を図るように行われた。本分科会では敢えて参加者をグループ分けせずに討議を行う形式を選択した。分科会内全体で「一般の人々にどう伝えていくのか。」の主題を、共通の問題意識を持ち続け、参加者全員で議論を発展させていくという理由である。また、意見を集約する方法として、自身の考えをポストイットに記入してもらい掲示することで、意見発表時間の短縮、匿名性も確保しようと試みた。さらに、出された意見を座長によってパソコンにデータ入力し、プロジェクター投影することで、会議のビジュアル化を図り、

情報の共有化、論旨が明快なままで討議が進むよう配慮された。当分科会では、「良医治子」という明確なテーマであったこと、問題提起直後に行われた模範説教は、討議内容により具体性を持たせる効果があり、相まって議論の方向性は保たれる結果となった。討議の進め方については、分科会参加者全体で自由な意見を求めようと、精神に座長による采配がなされたことにより、座長に掛かる負担は別として、参加者のみならず運営側も討議に集中できたと言える。

二、問題提起の意図

『私達は現代社会の中で、法華経の教えの何を伝える事が出来るのでしょうか。一人一人の教師が、今一度法華経を再読いたしました。この分科会では如来寿量品に焦点を当てて、「良医治子」の譬えを手がかりとして現代社会に対応した教化学を皆さんと共に議論したいと思えます。この「良医治子」の物語は誰に何を伝えようとしているのでしょうか。また私達は何を伝えるべきなのでしょう。良医（父）・迷える子どもたち・良薬・父の死・父の遣い・救済、現代に生きる私たちにとって、これらの意味するものは何なのでしょう。この物語をどう受け止めていけばよいのでしょうか。第IV分科会ではこれらの議論を深め教化方法を探り、今一度法華経を再読し檀信徒・未信徒教化に活かしていきたいと思えます。』（問題提起文）と示すように、まず第一に「良医治子」の物語は「誰に」、「何を」伝えようとしているかという命題を掲げ、良医（父）・迷える子どもたち・良薬・父の死・父の遣い・救済をキーワードとして、再読することにより、開催趣旨にあるように、法華経の魅力を改めて問い直し、確認し合うことで、法華経の感激と感動を檀信徒・未信徒の皆さんに伝えていく一助となる会議としたい旨が伝えられた。

続いて、当該テーマの「模説」により、今まで本宗において一般的に説かれているであろう内容を示し、討議の導入とする。

三、模説内容概略

『現代語訳 妙法蓮華経』（記者・藤井教公）二七三〜二八四頁を参考資料としながら、模説担当者により、さらに「良医治子」のなかに説かれた概念、内容のポイントではないかと思われる点をスクリーンに映しながら進められる。

・「良医治子」模説の内容

ある国に大変に智慧があり、腕の立つ優秀な医者がありました。その医者には多くの子どもがいて、どの子も愛情深く育てていたのです。その医者が他の国へ用事があって旅に出かけているあいだ、留守番をしていた子供たちが、誤ってそれとは知らず、家にあった毒薬を飲んでしまいます。子どもたちはもがき苦しみます。旅から戻って、子どもたちが苦しんでいる様子に父である医者は驚いてしまいます。子どもたちの症状はさまざまで、毒がまわってもとの心、本心を失い錯乱状態にある子もあれば、そうではなく、心を失ってはいない子もおりました。子どもたちは医者に訴えます。「愚かにも私たちが誤って毒薬を飲んでしまいました。お父さん、どうか私たちを治療してください」さっそく、子どもたちの苦しみを除くため、医者は毒薬を中和する薬を調合します。医者を作った薬は色・香り・味のよい薬でありまして、それを子どもたちに服用するよう勧めるのでした。子どもたちのうち、心を失っていない子たちはこの父が調合してくれた薬の色・香りが良いのを見てすぐにこれを服用し、本心を取り戻します。しかし、毒が深くまわっている子どもたちは、父である医者が近くにいることをいいことに、その解毒剤を飲もうとはしないのです。毒のせいでこの薬の色や香りがすばらしいものだと感じられないのです。医者の方は一計を案じます。「この子たちに解毒剤を飲ませるため、私はある手だてを講じよう」と考えたのであります。そして、子どもたちにも伝えます。「お前たちよ、よく聞きなさい。今から私はもう一度他の国へ行かなければならない。それに私は老衰して死期が近づいている、旅先で死ぬこともあるかもしれないのだ。このすぐれた薬をいまここに置いておく。お

前たち取って飲みなさい。薬が効かないと心配することはない」こう言い残して医者はまだ家を出て、遠い国へと行ってしまいます。それから、その遠方から使いの者を家へ出向かせて、本心を失い、薬を飲もうとしない子どもたちに対して、「あなたたちのお父さんは、旅先の遠い国で亡くなってしまいましたよ！」と告げさせるのです。父がこの世を去ったという使者の言葉を聞いた子どもたちはびっくり仰天し、はげしく動揺、悲しみ、悩みます。「もし、お父さんが生きていてくれたなら、きっと私たちを守ってくれたのに。でも、もう私たちを見捨てて遠くの国で亡くなってしまった。これからの自分たちのことを思うと、いったい誰を頼りにすればよいのか、守ってくれる人もおらず、頼みとするものもない」といったように悲しみと苦悩が子供たちをおそいました。いまさらのように、父のありがたさを知るのでした。そうして薬を飲まなかった子どもたちは、その悲しみを懐いて、本心を取り戻すのです。これはいってみればショック療法です。子どもたちは、ようやくここに至ってこの薬が色も香りもすばらしいことに気づき、医者の方が残していったすぐれた薬、解毒剤をすぐに飲むのです。そうして毒の病は治ったのであります。医者はこの瞬間を待っていました。子どもたちがみんなが薬を飲み、毒の病が癒えたと報せを受けた医者はようやく安心して家に戻って帰り、子どもたちに自分が元気な姿を見せて、親子ともども喜び合いました。……これが良医治子のたとえです。このたとえを示されたあと、釈尊は弥勒菩薩をはじめとした説法の場にいる人々に語りかけます。「善男子たちよ、このことをみなはどう考えるだろうか。この医者が子どもたちをだました。いつわり〴〵の罪をいったい誰が責めることができるだろうか」と。善男子たちは「いいえ、（責める者など誰も）おりません、釈尊よ。」と答えます。釈尊の問いに対し、「いいえ、この医者が嘘つきだなんて、そんなこと誰も思いません。子どもたちを救うための手段だったのですから」という思いです。みななを思いを確認された上で、釈尊はおっしゃいます。「私もまたこれと同じである。私が仏となつてからこのかた、無量無辺百千万億那由他阿僧祇の劫という、無限に永い時間が過ぎていく。私は衆生たちのために、教えの手だての力によって『私は入滅するであろう』と言う。しかし、私の

いつわりの過失を責めることのできる者はいないであろう」ここで寿量品の長行が終わり、お自我偈に入っていくこととなります。（以上模説内容）

以下、模説者がポイントとする点を①②③にまとめて説明

①登場人物は何を意味するのか……医者（父・良医） 〓 釈尊、子どもたち 〓 末法の衆生、すぐに薬を飲んだ子、すぐに薬を飲まなかった子の相違は何なのか。

②汝（なんじ）取って服すべし……釈尊の教化は「応病与薬」であること。「是の好き良薬を今留めて此に在く」

③本当に毒病を治すためには、自分自身で取らなければいけない事

本心を取り戻す……良薬を飲んだから本心を取り戻したのではなく、父を失った「悲しみ」が本心を取り戻させる。良薬を服すということを檀信徒にどう説明しているか。といった内容を具体的に示し、参加者がそれぞれどう理解しているのか。また、檀信徒に対してどう説明しているかという問いも同時に投げかけた。

四、基調報告・基調講演との連続性

基調報告「法華経は現代の私たちの物語」のタイトルをそのまま分科会に当てはめて考えると、「良医治子」を現代の私たちの物語としてどのように伝えることが出来るかということであろう。人々に説くためには、自身の信仰として語ることが鍵となる為、必然的に参加者自らが自分の直面する問題として、意欲的に再読する分科会となった。また基調講演「法華経を現代に読むーインド学・仏教学の視点から」の法華経編纂意図の流れのなかで、「如来寿量品第十六」と『分別功德品第十七』では、如来の滅後であっても、『法華経』が説示される限りブツダ如来である釈尊は永遠にこの世に現存し、衆生利益の（ハタラク）をなし続けると開示される。（会議資料九頁）ということから、当分科会に直結しており、言うまでもなく討議に反映される結果となった。

五、分科会討議（まとめ）

問題提起・模説を踏まえ、参加者各々が理解している内容や疑問点、提案等を寄せてもらう。

一日目

座長より先ず、問題提起・模説後の段階で、あらためて気付いた点はなかったか、また、良医治子の話を未信徒にどう伝えるか、（例えば通夜等の場でどう説くか。）という問いが投げかけられた。以下抽出する。

○正直今まで深く考えていなかった。父が留守の間に毒薬を飲んでしまったこと、また、わざわざ使いを遣わして亡くなったと告げたりという事には何か深い意味があるのではないかと考えさせられる。

○そこになぜ「毒薬」が無造作に置かれていたのか疑問を持った。このことは重要な点だと思う。なぜならば、毒というのも薬の一種だと捉えると、どちらもた易く手に届く存在であって、最終的には法華経を選択すれば良いのだが、間違つて毒となる宗教を選択する人もいるのだから、何か現代に通ずるものがあるように感じる。

○「本心」を取り戻すということは、何を示しているのだろうか。薬を飲んでではなく、本心を取り戻したのだとすると「薬」は何だろうか、「お題目」を唱えることのように感じる。（座長）……薬を飲むきっかけとなったのが、父の死であり、そこに「気づき」という要素が存在しているようにも思われる。

○「良薬」を無理やり服させるのではなく、自分で薬を飲むことを選ぶということ、選択させるということは、「気づき」の大切な要素だとすると、そこには時間を超えた仏の慈悲心が感じられる。

○苦しんでいるのにも関わらず、薬も飲まないくらいに「本心を失う」とは、如何なる状態なのか、想像しづらい。無理やりにも飲ませることが、「親の愛情」だと言う様な反応もあるのではないか。

○転校生の自死を防げなかったことに苦悩している同級生に寄り添うことがあったが、助けようとするほど、

逆効果になってしまった経験がある。自分が伝えたい事を、人に気づいてもらう方法、信じてもらうことの難しさを実感した。だからこそ、私達僧侶は、信じて聞いてもらおう、そして気づいてもらうよう努力すべき。

○今回、あらためて、この物語を読み返すと様々な疑問点がでてきた。自分が持った疑問に何て答えればよいのか、困ってしまう。特に未信徒に対しては、このままでは対応できない。

〔座長〕 様々な疑問に対して、我々はどのように答えてゆけば良いのか、常に問題として持ち続けることが重要、この分科会討議が法華經の意味を「再度考えるよい機会」と捉えて討議を進める旨を確認する。

〔顧問〕 討議を継続するにあたって、現代にどう受け止めていくかという点で、例えば「毒」というものをどう受け止めるか、その要素は何なのかを考えていくこと、そのなかで、人間社会の問題点が浮き彫りにされる筈。「譬え」という手法であるが、「良薬」という言葉一つでも、もっとイメージしやすいものへと、変化させていくこと、前述の「気づき」が大切であることを踏まえて、本佛と我々との関わりの再認識をしていくことが重要である。自分なりのストーリーを描いてみたらどうだろうかと提案したい。どうすれば伝えやすくなるのかを探ろうとの助言。

〔顧問〕 「毒」「薬」は表裏一体のものとして捉え、「本心」とは何なのか、「五欲」というものも人間にはあります。物語の結論と結びつけて考えていく必要がある。

〔座長〕 顧問の助言も加え、「毒」について、言い方を変えて、何と表現したら良いのか、現代人にとっては具体的に何を指しているのか、設問を絞る。

○私自身が自然界の生命活動に支障（不都合）を与える物質として「毒」である。自らの存在に気付くことがますます重要だと思ふ。様々な事象を自らが認識できるかという事です。

一日目の最後に「付箋」を配布し、①感想・気付いた点、②この物語を説く際のキーワード、について記入してもらい、二日目の情報共有と討議の端緒とする旨、座長より提言がなされる。

・二日目（付箋に記入してもらった内容をもとに、「毒」「薬」の関係性や「気付き」、について、前日の討議内容をさらに発展させて行くことを確認）

付箋①（感想・気付いた点）について

- ・そもそも何でこんな譬え話を作ったのか。　　・噛み砕いて説明できるようにしなければならない。
- ・「毒」と「薬」は表裏一体で、同一視すべきもの。　　・法華経を再認識する良い機会となった。
- ・スマホは毒

付箋②（この物語を説く際のキーワード）について

- ・予定調和　　・いつわりの罪、虚妄の罪　　・自ら「気づく」こと　　・毒変じて薬となる
- ・「大良薬」とは何か（未信徒への伝え方）　　・抜苦与楽　　・自らの毒、社会の毒
- ・心を失う苦しみ「苦」をどうやって救えるのか　　・「優しさ」「おもいやり」　　・家族の絆
- ・仏心、仏子　　・慈悲の心

以上座長により大別され、「毒」の在り方、譬え話を使う理由について、比喩の多様性、どう捉えるのかは個人の自由である「物語」という存在、といった事も合わせ考えていくように促される。また、広く寿量品全体として捉える視点も加える方向性が示される。

・「気付き」ということについて、

○スポーツ指導（サッカー）をしているが、大人がいくら熱心に理屈を教えただけでは駄目で、子ども自身が気付

くことで成長していくと感じる。指導する側はその環境づくりをすることが大切となる。ある時はその場に居なくなり、何をどうすれば良いかを、子ども達自身に気付かせるように仕向けていくのと「良医治子」が重なる。

○父が旅に出る、いなくなることで、普段気付く事ができない父母の有難さを、気付かせるのだと考える。

○自分自身も父母がいることが当たり前と思つて気楽に生活していたが、父を交通事故で失つてはじめて、気付くことが沢山あった。大事なものを無くすことによつて気付かされるということを実感した。「個人の死」、「死からはじまる生」といった「死生学」のことも示しているように感じる。

○若い世代に対して説くのなら、ツイッター等のSNSについては、スマホ依存を「毒」、便利なツールとして利用するのは「薬」として説明したらどうだろうか。本当に大事なものは何なのかを考える題材として取り上げ、スマホでは実感することが出来ないものとして、家族の優しさであったり、無くなることによつて見えてくるものがあることを、気付かせてくれる、といった話に繋げてみたい。

○我々教師自身の「気付き」が必要不可欠である。伝える側が気付いていないことを、説ける筈がない。まずは、教師自身の法華経色説がなければ、絵に描いた餅で終わってしまう。

○「気付き」ということは一番難しいことだと思われる。何故なら、自分自身では「気付く」ことができる人間だと思ひ込んでいる。自分には関係ないことだと無関心になっている。駄目だと分かりながら、飲酒運転をしてしまったら、性的犯罪についても、もしかしたら自分も罪を犯してしまうかもと考えられるかというとなかなか難しい。自分自身が毒薬を服している状態なのではないかという自覚をもつて、さらに言えば「十界互具」を理解していることを前提にしていかないと、真の「気付き」は成しえない。

・何を気付かせるのかという問題について、寿命品全体から考える。

○「気付き」とは、「毎に自ら是の念を作す」・・・仏の「慈悲を」感じ、「仏性」、「仏心」、「仏子」に気付くこと、

「煩惱即菩提」という法華経全体に通底する概念を理解することだと言える。

○「常住此說法」（常にここにとどまって法を説き続けているのだ）とは、我々衆生に対して、時間を超越して（待つてくれている）救済の手を差し伸べてくれている本仏の姿を現している、仏の慈悲を感じる。同時に我々がお互いを敬い、他者を思いやる気持ちを持つことで、姿を現し、法を説いてくれることも表現している。

六、おわりに

開催趣旨のなかで、「当たり前になりすぎていつしか宝珠は衣の裏に隠れてしまっていないか」と指摘されるように、参加者のなかには少なからず、「今まであまり深く考えていなかった。あまり勉強しなかった。」と反省する声があった。今回の教研会議で、複数の教師が集まって法華経を再読する機会を持った事は、それ自体が有意義な時間となった筈である。現代にこの宝珠の素晴らしさを発信するためには、教師自身が原点に立ち戻り、法華経を現代の物語として再読し、尚且つどう伝えていけば分かり易いのか、を真剣に討議されたことは一定の成果をあげたと言える。しかし、「良医治子」だけ採ってみても、限られた時間のなかで、議論が尽くされたとは到底言い難い。我々教師一人ひとりが自分自身の問題として継続して法華経に向き合い、時代とともに流動する社会の変化を敏感に察知し、現代的な物語として法華経を衆生に語る知識と技術を磨き続けなければならない。